
仮面ライダーシャイン

ウェイカップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーシャイン

【Nコード】

N1702Q

【作者名】

ウェイカップ

【あらすじ】

光の都市と呼ばれる街『光明市』に降り立った、別世界からの侵略者。彼らに対抗するのは、光を司る仮面の戦士、シャイン。光の街を舞台に、光を司る少女の戦いが始まった

予告（前書き）

テレビの新番組予告っぽく仕上げてみましたw

予告

新連載 仮面ライダーシャイン

——うん、今日もいい光が注いでるね〜！

光の都市と呼ばれる光明市

そこに現れたのは、別の世界から出現した謎の組織『ダークネス』

彼らの狙いは、自らの世界からこちらの世界に散らばった、超エネルギーを集める事だった

——力を全て集めて世界を我が物にする。それこそが、あいつらの目的だ

その野望を食い止めるべく、彼らを追ってこの世界にやってきた彼が出会ったのは、

光明市で生まれ育った1人の少女だった

—— あたしが！？あなたと！？合体するう！？

大好きな街が、世界が滅ぼされると知った時、少女は受け入れる

光の力を司る、仮面の戦士になるための力を

—— いいわよ、覚悟決めたわ！やってやるわよ！！

光の都市を舞台に、光と闇の戦いが今始まる！

—— 変身！

ウェイカップ オリジナル仮面ライダー 始動

仮面ライダー シャイン

近日連載スタート

予告（後書き）

ども、ウェイカップです！はじめましての方もいらっしやるでしょうか？

さて、今作は私がお送りします、オリジナルの仮面ライダー作品となります。

・・・そこ、『光の都市』とか、風都に似てるとか言わない！別にWとは関係ありません。関係ないったらない・・・予定です（なんだそれw

当サイトで僕が連載させていただいている、ディケイドデュアルストリーズが他の作品とのクロスをメインにしているのに対し、今作は完全にオリジナルです。

主人公、敵組織、舞台、必殺技などなど、全ての設定を一から考えてあります。

みなさんの心に少しでも残ったら・・・その想いを持って、執筆を開始いたしました。

近日中に投稿する第1話から、ついに始まる新たなる仮面ライダー。よろしければ、お付き合いいただければ幸いです。

では、ご感想おまちしております！

第1話 光と光の出会い 前編（前書き）

当作品は、1話を前編後編で分けてお送りします。
それでは、どうぞ！

第1話 光と光の出会い 前編

こしみょうし
光明市。

太陽光発電が盛んなこの街は、その名の通り『光の街』と呼ばれている。

首都の外れの小高い丘の上を中心に、丘を囲むように立てられた住宅街の屋根には、実に90%以上の家に太陽光による自家発電システムが備わっていた。

梅雨の時期には弱いが、それを補って余りあるほどの光のエネルギーを蓄える街。

それが、この光明市である。

そんな光明市の外れにある一軒家。

1階建ての小さな建物から、1人の少女がドアを開けて外に出てきた。

ドアに鍵をかけ、雲の間から見える太陽を見あげる。

「うん、今日もいい光だねー！」

光を受けて輝く、腰までの長さの亜麻色の髪を青いリボンでまとめ、身に纏うのは彼女が通う学校の制服。

とある雑誌に載っていた『人気制服ランキング』なるもので、3位というめでたいのか普通なのか微妙なラインに選ばれた、クリーム色を基調としたブレザータイプのものだ。

服に袖を通して既に2年が経ち、先日の終業式を持って2年生の学業を終えた彼女は、あと数日もすれば最高学年に上がり、それから誰もが通る受験戦争へとその身を投げ出す運命。

そんな恐怖の3年生となる彼女が、長期休暇・・・所謂春休みの期

間中、どうして制服に袖を通し、肩に白い和装を背負っているのか
というと、彼女が所属する部活動のためである。
手を広げ、光をその身に受け続けていた少女は、やがて右手を掲げ
ると太陽に伸ばした。

まるで太陽を掴むかのように差し出された手を、勢いよく握る。

「よし、充電完了！今日の試合頑張るぞー！」

笑顔を見せ、愛用の自転車の鍵を解除すると乗り込み、勢いよく漕
ぎ出した。

彼女の名は、『泉^{いずみ}ヒカリ』。

見た目はそれなり、ルックス普通、学業苦手、運動が得意という、
どこにでもいる少女。

そして、自分が生まれ育ったこの街が大好きな少女である。

「せあっ！」

裂帛の気合と共に、ヒカリが繰り出した右の正拳突きが対象の顔面
にクリーンヒット。

自分と同じ白い和装——胴着を纏った相手の男性が驚愕の声を上
げる前に、審判の手と声が上がった。

「赤、一本！」

「よしっ！」

もはや癖となつた声と共に、ヒカリの勝利が確定した瞬間。
対岸の相手側からはため息が、後方の味方側からは賞賛の声と拍手
が上がった。

「すげえ！男相手にストレート勝ちだぜ！」

「そりゃあ、我が光明学園期待のエースだからな！」

「きやああああ！ヒカリ先輩かつこいー！」

味方陣で様々な声上がる中、最後の礼を終えたヒカリが味方陣地
へと戻りながら、頭にはめていたヘッドギアを外した。

汗で濡れた顔を振り回し、自慢の長髪が虚空に揺れる姿は一つの絵
となっている。

自陣に戻ってタオルで汗を拭くヒカリの傍に、制服を着た一人の少
女が駆け寄った。

薄い青のショートカットにヘアバンドをつけ、手には様々なデー
タが書き込まれた書類。

ヒカリと同じ年頃の少女は、水筒から注いだスポーツドリンクを差
し出す。

「ヒカリ、お疲れ！」

「おつ、サンキュー朝陽」

空手部マネージャー『星奈朝陽』ほしなあさひ からドリンクを受け取り、一気に

飲み干して息を吐く。

ヒカリの幼馴染でもある朝陽が持ってきたのは、レモン水をベース
として作った特性ドリンク。

試合後の即座の水分補給と体力回復を促すために、空手部マネー
ジャーに代々製法が伝わるもので、今は朝陽が家で作っている。

ヒカリがドリンクを飲むその間に次の試合が始まり、チーム戦最後

となる大将戦が始まっていた。

説明しておくと、ここは光明市にある市民体育館。

本日ここでは、光明市を中心としたいくつかの市の代表校による、空手部の対抗戦が行われていた。

ヒカリや朝陽が所属する光明学園の空手部は光明市の代表として選ばれ、現在は最終戦となる、とある高校との試合中。

幼い頃から空手を嗜んでいるヒカリは既に頭角を現し、今回の対抗戦に副将として出場して見事勝利。

現在、2勝2敗のイーブン。つまりこの試合の結果で勝敗が決まるといった状況だ。

「ぜあああああつ！！」

「ふっ！！」

対戦校の大将が繰り出す右足の回し蹴りをいなし、詰められた距離を一気に離す光明高校の大将。

現空手部の主将である彼が、後ろに下がるとみせかけて一気に前に出た。

相手は当然前に出てきてたので、いきなり出てきたコウに対して反応が間に合わず、

「せいやっ！！」

互いが前進する勢いを加えた強烈な蹴りが、見事に対戦相手の脇腹に直撃。

素人目から見てもすぐに分かる、完璧な一撃だった。

変幻自在の足裁きから放たれる一撃が、この試合の結果をも一瞬で決めた。

「赤、一本！よってこの試合、光明学園の勝ち！！」

次の瞬間、光明学園側から歓声が巻き起こった。

「それでは！光明学園空手部の大会優勝を祝ってえ！！」
『かんぱーい！！』

グラスを打ち鳴らす音があちこちから響き渡り、同時に部屋は無数の声に包まれた。

光明学園の近くにある、小さな喫茶店『Bright・Bright』。

学園の生徒がよく通うこの喫茶店は、本日は貸切営業。

店の中にいるのは、今日の大会で優勝し、優勝盾を手にした空手部の面々だった。

「すみませんマスター。いきなりこんなに押しかけちゃって・・・」
「いいのいいの。せっかくの優勝なんだし、今日は無礼講だって！
よし、俺のおごりだ！店にあるジュース、片っ端から飲んでいけえ！」

『おおおおおっ！！』

「あはは・・・マスター、ほんとに騒ぐの好きですよねぇ・・・」

店のマスター『あかしあきこ明石晃』が、カウンターからオレンジジュースのボトルを取り出し、生徒達に配っていく。

この子供のような無邪気さと人の良さ、そして店で出す料理の上手さも相成って、Brightは光明市でもそれなりの人気店だ。

皆がジュースを受け取り、晃が次々と出す料理に舌鼓を打ち、店から笑い声が消える事は無かった。

そんな中、店の隅でオレンジジュースをちまちまと飲むのは、今日の大会で値千金の勝利を勝ち取ったヒカリ。

皆と騒ぐのは好きだが、今日はさすがに疲れていたので横で大人しくしている。

そんなヒカリに気付いたのか、隣に座ったのは朝陽だった。

「ヒッカリ！どうしたのよ、そんな疲れた顔しちゃって？」

「ほんつとくに疲れてるのよぉ・・・今日の試合、あたしがあそこで勝たなかったら負けてた訳だし・・・主将が最後に勝つのは信じてたけど、あたしが負けたらそれも無かったんだしい・・・」

「なぐに言ってるのよ！空手部期待の星が！そんな顔してたら、男なんか寄ってこないわよ？」

「べつつにい・・・あたし、彼氏とか恋愛って興味ないしい・・・」

机に顔をあずけ、飲み終えたグラスの氷をストローでかき混ぜる。そこにタイミングよく、晃が新しいジュースを持ってきた。

「どうしたヒカリちゃん、そんなしょぼくれちゃって？」

「ああ、マスター・・・いや、ほんつと疲れちゃって・・・」

「ふん・・・そうだ、ちよつと待ってな」

晃がキッチンに戻り、冷蔵庫から取り出した何かをグラスに注いで持ってくる。

朝陽の分も含まれているのか、2つのグラスを机に置いた。

「俺の特製ブレンドジュースだ。これ飲んで、んな辛気臭い顔なん

かふつとばしちまいな！ほれ、朝陽ちゃんも！」

「ありがとう、マスター」

「んじゃ、あたしももっらいっ」

グラスを手を取った二人が軽く打ち合わせ、同時に唇をつける。

口に入れた瞬間、ヒカリの口の中に広がったのは、甘いオレンジとリンゴの味。

そして、微量のアルコールだった。

「・・・マスター、これって・・・？」

「ん？オレンジとリンゴをベースにして、ちよつとだけカシス入ってるな。ほんつとにちよつとだけだから、んな酔っ払うほどじゃー

――」

「ひっかりっ」

「ひゃっ!？」

晃がカウンターから答えた途中で、いきなり朝陽がヒカリに抱きついた。

声に呂律は回っておらず、明らかに酔っ払っている。

「あ・・・朝陽ちゃん？」

「ひゃい？なんでしゅかましゅた？あたしはいま、ひかりといっしょなんでひゅよっ」

「ちよ、ちよつと朝陽！あんた、まさかこれだけで酔っ払って・・・って、どこ触って!？」

「ん、ひかりったら、いつのまにこんなおつきくなってるんだよ
おねえさんに、ちよつとみせてみなさっいっ」

「き、きやあああ！ボタン外すなあ!!」

酔っ払って親父化した朝陽の顎に、顔を真っ赤にしたヒカリの鋭い

アップパーが炸裂した。

「くかあゝ・・・う、にゆう・・・ひつく・・・」

「もう、朝陽ったら・・・ごめんねコウ」

「いいっていいって。こんな状態の朝陽、お前1人に任せる訳には
いかないだろ」

既に日が落ち、街灯が照らす道を歩いていく3人の影。

1人は自転車を押しながら歩くヒカリ。

自転車のかごには、彼女の持ち物である胴着の他に、隣で肩を並べ
て歩く青年の荷物も入れてあった。

黒い短髪にブレザーのネクタイを緩めている彼の名は『鈴木^{すずむらこ}洸太』、
通称『コウ』。

彼が背負う朝陽と同じように、彼もヒカリの幼馴染であり、空手部
のメンバーでもある。

朝陽酔っ払い事件の後、宴もたけなわで解散した空手部面々だった
が、結局朝陽はずっと眠り続けてしまい、ヒカリとコウが連れて帰
る事になった。

家もそれなりに近所であり、幼い頃から行動を共にしている3人と
いうこともあつての事である。

ちなみに、例のジュースはヒカリの無言の圧力もあり、晃が泣く泣
く処分したという。

「なあヒカリ。お前、進路とかって決めてるのか？」

「えっ、何よいきなり」

家への帰り道の最中、突然コウが話しかけた。

「いや、俺達も来週からもう3年だろ？部活も夏には引退だし、卒業した先輩達だって、去年の今頃は進路とか話してたじゃんか」

「うーん・・・あたし、去年は試合中に怪我しちゃってしばらく部活休んでたから、ちょっと覚えてないなあ」

考え込むが、怪我をして松葉杖をつき、歩くのに苦労していた1ヶ月間の苦い思い出のみが浮かび上がっていた。

同時に進路について軽く考えてみるが、これといった案も浮かんでこない。

「・・・まだ、分からないわよ。

進学・・・するとは思っけど、具体的に何を専攻するかなんて決めてないし。

ほら、あたし勉強はからつきしだからさ」

ヒカリの学業の成績は、はつきり言って下から数える方が圧倒的に早い。

通信簿は保健体育以外の欄に1か2以外の数字が出たことなどはなく、今でも職員室で小言を言われるのなど日常茶飯事。

それでも彼女が進級できるのは、真面目な授業態度と無遅刻無欠席という実績。

そして、保健体育だけがずば抜けて成績がいい事が理由だ。

そんな事は、幼馴染であるコウももちろん知っている。

故に、ヒカリの答えも知っていたはずだが、何故そんな事をいきなり聞いてきたのか？

「・・・俺はさ、スポーツ医療の勉強をしようと思ってるんだ」
「はっ？コウが・・・医者？」

コウの発言に、あからさまに反応するヒカリ。

その声には「何言ってるんだあんたは」という感情が、ありありと溢れていた。

「医者っていうより、トレーナーって感じかな。

こうしてみんなと部活してて、ずっと考えてたんだ。

俺達みたいにスポーツしてる人って、色んな人に支えられてるだろ？

俺はさ、お前と違ってそこまで運動神経良くないし、相手の動きなんかを徹底的に研究してどうにか結果を残してこれたからさ。

その考える方の力を、実際に試合をする人たちに役立てられたら・・・

って」

「ふーん・・・コウって、意外としつかり考えてるのね」

「茶化すなって。それで、お前はどんなんだ？」

「あたし？あたしは・・・」

コウの言葉に、自身の将来を考えようとしたヒカリ。

その足が突然止まり、隣のコウもそれに続いて静止する。

「おい、どうした？」

「ねえ、何かしらあれ？」

ヒカリが指差した先を見ると、そこは道路の中心部。

いつもなら街灯に照らされるだけで弱い光しか届かないその場所には今、圧倒的な光があった。

正確に言うなら、強烈な光を放つ何かがある、と言った方が正しいか。

「・・・光る、玉・・・か？」
「何だろ？」

自転車を止め、その光に小走りで歩いていくヒカリ。
その後をコウも追いかける。

「おい、そんな近づくなつて」
「大丈夫大丈夫、害は無さそうだしさ」

手を振って答え、少し緊張しながらその光に手を伸ばした。
すると、光が一気に溢れ出した。

「っ!？」
「うわっ!」
「・・・へっ?」

ヒカリとコウの驚きの声に、ようやく目を覚ました朝陽。
次の瞬間、3人は見えない何かに押し出されるように、地面へと叩きつけられた。

少しだけ気を失っていたのか、倒れた3人のうち、ヒカリの意識が
徐々に覚醒していく。

「う・・・ん・・・」

ヒカリが小さく息を漏らす。
頭を襲う軽い眩暈を振り払い、目をゆっくり開くと周囲を見渡した。

「っ痛・・・今の、何よ・・・」

左右を見渡し、先ほどまでいた道路とほぼ同じ場所だった事に気付く。

身を起こそうとし、手を横の地面についた所で、隣にコウと朝陽が倒れているのに気付いた。

「こ、コウ！朝陽！大丈夫？」

「・・・いてて」

「もう、なんなのよ・・・」

ヒカリの声に気付いたのか、二人も頭を抑えて意識を覚醒させた。朝陽に至っては酔いも完全に消えたようであり、視界が徐々にはつきりしていく。

3人が目の前の道路を見ると、道路の中心に一つの発光体が浮かんでいた。

先ほどより発光量は収まっているが、それでも光が強いのにには変わらない。

「ちょ、ちよつと、あれ・・・なに？」

「お、俺に聞くなよ・・・さっきの光の原因・・・だと思うが・・・」

「

目の前の光る物体に朝陽がつぶやき、コウが答えた。

光の都市と呼ばれる街に住んでる彼女達ですら、このような夜中に道路のと真ん中で輝く光の塊など見た事がない。

2人が少しずつ後ずさりしていく中、立ち上がったヒカリがゆっくりと光に向けて歩き出した。

「ちょ、ちよつとヒカリ！」

「大丈夫、危ないものじゃないみたい・・・」

「危なくないって、なんで・・・」

「分かんない・・・分かんないんだけど、分かるの」

朝陽が止めるのも聞かず、少しずつ光に近づいていく。

やがて片手を伸ばせば光に届くぐらいの距離まで近づくと、無意識に手を伸ばしていた。

その手が少しずつ、圧倒的な光量を持つ物体に近づいていく。

その刹那、ヒカリの全身を一気に悪寒が襲った。

悪寒に従い、全力のバックステップで体を後退させたヒカリの頭上から、突如舞い降りてきた影。

影は固いコンクリートの地面をたった一発で粉みじんに打ち砕き、ヒカリ達と光の間に立ち塞がる。

「ひ、ヒカリ!？」

「大丈夫・・・だけど・・・」

「おい・・・なんだよ、あいつ・・・!」

影の背後にある光に照らされ、影の表情こそ分らないものの、その輪郭ははっきりと見えた。

まず、頭部には闇夜に光る赤い二つの瞳。

それも人間の物ではなく、まるで鳥のように鋭い、血のように赤い瞳だった。

両手と思われる場所には手は無く、無数の羽に覆われた黒い翼と、先端から伸びる鳥のような鋭い爪。

そして地面を叩き砕いた足は、手の先端の爪より遥かに巨大な、3本の鋭い爪。

見た目だけを率直に言うなら、巨大なカラスのような怪人と言うべきか。

「カラスの化け物・・・!？」

『ふん、こつちの世界の生物か』

「しゃべった!？」

怪人が声を発した事に朝陽が驚き、コウが声を張り上げる。

「来るぞ！」

カラス怪人が手・・・いや、羽を広げ、足元の爪で地面を踏みしめるのと、本能的にコウとヒカリが構えたのは全くの同時だった。

カラス怪人は黒い羽根を散らして空に舞い上がり、街灯の光を切り裂くように急降下。

ヒカリが左に飛び、コウが朝陽を抱きしめて右に飛ぶのとはほぼ同時に、カラス怪人が3人がいた場所を通り過ぎる。

その背後にあったヒカリの自転車は、カラス怪人の体当たりの一撃で固いフレームを中心に叩き折られ、空に舞ってから地面に叩き落された。

「ああ！あたしの自転車あ！」

「んな事言ってる場合か！とにかく、逃げるぞ！」

『逃がさん!』

踵を返して走り出した3人の背後に向け、カラス怪人が手を振るう。空中に黒い羽根が舞い上がり、カラス怪人が掲げた手の動きに合わせて、羽根はまるで手品のように空中に静止すると、怪人が手を振り下ろすのと同時に高速で飛来。

3人の周囲に降り注ぎ、固いコンクリートの地面に突き刺さる。

「きゃああああ！」

「っ！」

その衝撃の僅か数コンマ前、ヒカリと朝陽の背中が突如押し出された。

うつぶせに倒れた2人の周辺に突き刺さる羽根。

しかし、彼女達の体に羽根が突き刺さる事はなかった。

目を開けた2人が見たのは、2人を守るように手を広げ、自らの背中に無数の羽根を突き刺したコウの姿。

「こ、コウ!?」

「あ、ぐ……っ……!」

背中から血を流し、膝について倒れたコウをヒカリが支える。

「こ、コウ!しっかりして!コウ!」

「だ……大丈夫、か……?」

「そんな事言ってる場合じゃ……っ!」

抱きとめたコウの背中に回していた手に、何かがねつとりと絡みついていた。

手を見てみると、街灯の光でハッキリと見えた、赤い液体。

コウの背中から流れ落ちる血だ。

直視した朝陽が小さく悲鳴を上げる。

「ひっ……!」

「2人、とも……逃げろ……」

「あ、あんたを置いていける訳ないでしょ!」

「いい、んだ……俺が、あいつの注意を、引くから……」

口元から流れる血に染まった手でヒカリの肩を押し、震える足に力

を入れて立ち上がる。

そのまま後ろを向くと、震える体でカラス怪人に向き合った。

「来い・・・！俺が、相手だ・・・！」

『ふん、我ら『ダークネス』に逆らうとは・・・その根性だけは認めてやろう』

「ダーク、ネス・・・？」

『だが安心しろ。貴様だけではなく、そこにいる小娘達もまとめてあの世に送ってやるっ！』

怪人が両手を広げ、先ほどの倍以上の数の羽根が宙に舞い上がる。その羽根全てが自分達の方に向けられた事に、3人の心に絶望が走った。

『死ねえ！！』

怪人が手を振り下ろし、100以上の羽根が3人に雨のように降り注ぎ、自分達の最後を悟った朝陽が目を背け、コウが2人だけでも守ろうと手を大きく広げ、ヒカリがコウの背中に手を伸ばした。

そして、光が舞い降りた。

ヒカリ達と怪人の中心に降り立った光に羽根が触れたと思うと、羽根は一瞬で霞のように消え去った。

「・・・えっ？」

目の前で起こった出来事にヒカリが啞然とし、自身の身に何も起こらなかった事に朝陽が目を開き、限界を迎えたコウが意識を失うのは同時だった。

前に倒れたコウを、降り立った光・・・いや、人間のような姿の何

かが抱きとめる。

「・・・光の、人間・・・？」

ヒカリが抱いた最初の感想がそれだ。

コウを支えた目の前に立つ人物は、白一色で染まった鎧を身に纏い、顔の部分は白い仮面で覆われている。

その仮面に目立つのは、左右に伸びる二本の白い角と緑の複眼。

背中の上部、肩の辺りからは白いマフラーのような物が左右に伸び、腰には一本のベルトが巻かれ、結晶のような装飾が成されていた。

光の人間はコウを地面に寝かせ、立ち上がってカラス怪人に向き合う。

『き、貴様は！？』

ダークネスと呼ばれたカラス怪人はその人物を知っていたのか、驚きの声を上げる。

同時に、光の人物は一気にダークネスへと駆け出した。

第1話 光と光の出会い 前編（後書き）

ども、ウェイカップです！

ついに完成しました、仮面ライダーシャイン第1話！

いかがだったでしょうか？

今作もディケイドデュアルと同じように、一つの話の前編後編に分けてお送りします。

ディケイドデュアルのように、3話分に分かれないように頑張ります！ええ頑張りますとも！

また、オリジナル作品という事もあるので、キャラクター設定とライダー設定、敵設定なども別話扱いで投稿しようと思います。

次回、後編投稿と同時にご用意するので、お時間ありましたらそちらもご覧ください。

では、ご感想お待ちしております。

第1話 光と光の出会い 後編

光を纏った仮面の人物は、カラス怪人に一気に駆け寄ると右の拳を叩きつける。

カラス怪人はその一撃で吹き飛ばされ、離れた場所で体勢を立て直した。

『くそっ！まさか、貴様までこちらの世界に来ているとは！』

光の人物はカラス怪人が離れた隙に、道路に鎮座している光球の傍に駆け寄ると、ためらい無く右手を突っ込んだ。

やがて光が徐々に収束し、掌の中に納まったと思うと、パチンコ玉ほどの大きさの宝玉へと変化した。

まるで沈みゆく太陽を思わせる、オレンジの色だ。

『これで二つ目。これは・・・『パワー・エナジー』か、なら！』

『エナジー』と呼んだその宝玉を指で弾き、パワー・エナジーが宙を舞う。

落下地点に右手の手甲らしき装備を差し出し、そこに空いた穴へとパワー・エナジーが落下。

ダイレクトに穴に入ると、その穴に固定された。

『はああああっ！』

右手を握りしめて眼前に構える。

手甲にはめ込まれたパワー・エナジーが輝き、右手全体をオレンジのオーラで包み込んだ。

それを確認すると、飛び上がって右拳を構えて全力で叩きつける。

『ちいつ!!』

間一髪、その一撃をかわして空に舞い上がるカラス怪人。

そのまま空を切った拳は地面に炸裂し、周囲の道路に大きな亀裂を生みだす。

カラス怪人は舌打ちをしながら、闇夜に紛れて空に舞い上がって後退していく。

『逃がすかつ!』

一方、拳を地面から引き抜いた光の人物も姿を光の球体に変え、カラス怪人を追って飛翔する。

その場に残されたのは、目の前の出来事に呆然とするヒカリ達のみであつた。

「つて、待ちなさいよ!」

「ヒカリ!？」

朝陽が止めるのも聞かず、ヒカリは駆け出した。

すぐに追いかけるのではなく、すぐ近くまで来ていた自宅に飛び込み、居間から鍵をひったくるように取り出すと、隣のガレージを空けた。

そこに鎮座していたのは、ヒカリの父親が愛用している白い車体のバイクである。

ちなみにヒカリ、既にバイクの免許は取得済みだ。

備え付けのグローブとメットを被り、エンジンをかけてアクセルを吹かす。

しばらく乗ってなかったので不安だったが、問題なく動きそうだ。

そのまま自宅を飛び出すと、コウに肩を貸してここまで歩いてきた朝陽の姿を見かけると共に自宅の鍵を投げ渡した。

「ちょ、ちよつと！まさか追いかけるつもり！？」

「あつたりまえでしょ！こんな訳分かんない事態に巻き込まれて、黙っていられる訳ないじゃない！

後で連絡するから、それまでコウの事お願い！」

それだけ言つとヘルメットのバイザーを降ろし、光の人物とカラス怪人が消えた方角へ走り出した。

残された朝陽は、バイクの残す赤いランプをしばし見つめていたが、やがて肩を貸すコウが重態だという重要な事を思い出す。

「そ、そうよ！とにかく、病院に・・・」

「・・・う、ううん・・・」

その時、コウがゆっくりと目を覚ました。

「コウ！？え、うそ・・・！」

「・・・朝陽・・・？あれ、俺、なんで・・・」

揃って二人が出したのは、共に驚きの声。

コウの体には、先ほど受けたカラス怪人の攻撃の傷跡が一切残ってなかった。

何度か乗り回している父親のバイクを巧みに操り、ヒカリはようや

く目的の2人を発見した。

光明市の上空を駆け巡る、おそらく羽根で自分を覆って球体のようになっているのであろうカラス怪人と、それに真っ向から衝突する光の球体。

時刻が既に深夜近いというのもあり周囲に人の姿はないのか、それを目撃しているのは奇跡的にヒカリ1人だけであつた。

やがて何度目かの衝突の後、2人は町外れの丘を中心とした『光明^{こうみや}ヶ丘公園』へと落下する。

いつもなら子連れの母親達の談笑と子供達の笑い声が耐えない公園の中に響くのは、舞台を地上に映して激闘を繰り広げる光の人物とカラス怪人。

ヒカリもバイクを滑らすように停車させ、ヘルメットとグローブを投げ捨てて公園へと飛び込み、茂みの影から2人を見ていた。

同時に右手に持った携帯電話で、朝陽に自分の現在位置と状況のメールを済ます。

だが、先ほどと若干状況が違った。

カラス怪人の右足を両手でガードした光の人物は、地面を削って後退し膝をつく。

よく見ると、全身から溢れていた光が少しずつ弱くなっていき、光の人物の呼吸も弱くなっていた。

『くそっ、転位してきた時に力を使いすぎたか・・・っ!』

『ふん、どうやら力が出せないようだなっ!』

それを好機と判断し、カラス怪人は手を広げて羽根を散らし、光の人物めがけて一斉に発射した。

人物は立ち上がって左手を握って手甲を向けると、そこに宛がわれた薄緑色のエナジーが光を放つ。

すると手甲から薄緑の薄い膜のようなものが生まれ、巨大な半透明のシールドを形成。飛来する羽根をガードする。
だが、何十、何百という羽根を受け続けたシールドに徐々に亀裂が入っていく。

『っ！！』

『隙ありい！！』

空から急降下するしたカラス怪人の右足の爪がシールドに衝突。

先ほどの羽根攻撃で弱った盾に亀裂が走り、更に身を捻って左足を叩き付けた。

硝子が割れるような音と共にシールドが碎け散り、公園のシンボルでもある巨大な桜の木に叩きつけられ、背中を預けて座り込む光の人物。

衝撃で桜の花が周囲に舞い散る中、カラス怪人は高飛車に笑い声を上げた。

『はっはっはあっ！向こうでは散々邪魔をしてくれたようだが、こちではそうも行かないみたいだなあ！』

『はあっ・・・はあっ・・・！くそっ、こんな所で・・・！』

『・・・それじゃ』

立ち上がろうとするが、体に力が入らない。

もうこいつは自分の敵ではないと確信し、カラス怪人は一本だけ羽根を抜いた。

起用に爪と爪の間に挟みこみ、無造作に腕を振るい、

『死にな』

漆黒の羽根が高速で飛翔し、一直線に光の人物の胸へと突き刺さる

うとした、その刹那だった。

「せいやあああつ!!」

動けずにいる光の人物の目の前に、突如割り込んだのは茂みから飛び出したヒカリだった。

念のためにと持ってきた、空手の試合で使う白い革の手甲をはめ、飛来してきた羽根を叩き落す。

突然の乱入者にカラス怪人はもちろん、光の人物も驚きの声を上げる。

『お、お前は・・・さっきの・・・!?!』

「大丈夫!? 後は、あたしが!」

『や、やめろ! 奴らには、この世界の生物では勝てない!』

「そんなの・・・関係ない!」

眼前のカラス怪人に集中しながらも、後ろにいる光の人物へ声を張り上げた。

その声には、僅かな怯えと恐怖が含まれている。

「他の世界だのダークネスだのエナジーだの・・・ぜんっぜん何が起こってるのなんて、分からないわよ!

でも、あんたは無関係なあたし達を守ってくれた!なのに、逃げるなんて出来ないわ!」

『死ぬぞ! 怖くないのか!?!』

「ええ怖いわよ! 17年生きてきてここまで足がガクガクするのなんて、子供の頃にジャングルジムの上に登って降りれなくなった時以来よ!」

でもあんたが戦えないなら、ここで戦えるのはあたしだけじゃない! 朝陽も、コウも、あんたも! あたしが守る!」

『小娘・・・！ならば、望み通りにしてやる！！』

目の前で翼を広げ、再び羽根を散らせるカラス怪人。

さきほどの攻撃を打ち落とせたのは、数が一本だけだったのと、まっすぐ光の人物を狙っていたために射線が分かりやすかったためだ。しかし、今日の前には、先ほどとは比べ物にならない羽根の数。それら全てがカラス怪人の意思に従い、狙いをヒカリへと向けた。

その時、俯いていた光の人物がヒカリに声をかけた。

『・・・おいお前。名は？』

「えっ・・・泉、ヒカリ・・・」

『ヒカリか・・・その手甲、借りるぞ！』

次の瞬間、光の人物が翳した手から小さい光の球体が生まれ、二つに分かれるとヒカリの手甲に吸い込まれた。

手甲が白い光を発し、ヒカリの両手を包み込む。

「えっ、な、何よこれ！？」

『死ねえ！』

驚くヒカリの声に合わせるかのように、放たれる無数の羽根。

同時に、ヒカリの背後から飛来した手甲が小さいシールドを形成し、ピンポイントでヒカリに迫る羽根を受け止めていく。

後ろを向けば、左手の手甲を飛ばした光の人物が左手を動かし、シールドを遠隔操作していた。

『その手甲を介してなら、奴にダメージを与えられる！とにかくやってみろ！』

「わ、分かった！」

迷っている時間も無く、光の手甲を構えて走り出すヒカリ。
迫る羽根を避け、避け切れない羽根は光の人物が操作するシールド
がガード。
持ち前のフットワークを駆使し、カラス怪人の懐に入り込むと、光
の右手の拳を全力で腹部に叩き付けた。

『がつ！？』

「うそ、ほんとに・・・！？」

『ボサツとするな！一気に畳み掛ける！』

後ろで叫ぶ光の人物に従い、至近距離での格闘を仕掛ける。

長年空手で鍛えた動体視力は、カラス怪人の鋭い爪による攻撃をど
うにか見切り、少しずつだがダメージを与えていった。

大振りな爪の攻撃をしゃがんでかわし、その状態から右足を鋭く突
き出して足を蹴り飛ばし、手前に倒れたカラス怪人の顎に強烈なア
ツパーカットを叩き込んだ。

『ぐっ・・・この小娘があっ！！』

格下と見ていたヒカリから幾度も攻撃を受け、カラス怪人の怒りが
爆発。

空に舞い上がると、超高速でヒカリの周囲を飛び回る。

羽根の攻撃よりも遥かに早いそのスピードについていけず、肩を大
きく弾かれて倒れるヒカリ。

どうにか立ち上がるも、四方から迫る衝撃に何度もダメージを受け
てしまう。

制服は所々が破け、口元からは赤い血を流していた。

カラス怪人は空中に静止し、ヒカリの姿を見て高笑いを上げた。

『小娘が！我らダークネスに逆らうとどうなるか、思い知らせてくれる！』

貴様の次は、こんな場所まで追ってきた愚か者に、さっきの2人もだ！』

『そんなこと、させない！』

その言葉に、全身の痛みを無視して立ち上がる。

「ほら、どうしたの！？あたしはまだピンピンしてるわよっ！やれるもんならやってみなさいっ！」

『ならば！死ねえええっ！！』

立ち上がったヒカリの心臓目掛けて、足元の爪を構えて急降下。

ヒカリの肉を突き破り、内蔵を握り潰す勢いで迫るその爪がヒカリに迫り、次の瞬間静止していた。

横手からヒカリと怪人の間に割って入った光の人物が、両手を重ねて爪の一撃を防いだのだ。

『ぬっ、おおおおおっ！！』

そのまま両手を一気に広げ、カラス怪人が空中で体勢を崩す。

ヒカリの構えた左手と、光の人物が構えた右手が同時に繰り出され、カラス怪人の顔面に命中。

地面をバウンドし、真後ろの林に頭から突っ込んでようやく停止した。

『よく反応できたな』

「あんたこそ、助かったわ」

隣に立つ相手に軽口を言い、両者の声に笑みが浮かんだ。

だが、カラス怪人は呻きながらもなお立ち上がろうとする。

「って、今のでまだ倒せないの!？」

『・・・やはり、この手しかないか・・・ヒカリ』

「何よ？もうなんでもやってやるわ」

『そうか、なら・・・』

『合体しよう』

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

光の人物の発言に、素で返してしまった。

合体？声からして男の人と？つまり？

そこはやはり、17歳の年頃の女の子。

そして、保健体育の成績はダントツで高い。

結果、ヒカリの顔が一瞬で赤く染まり、次の瞬間周囲に絶叫が響き渡った。

「え、えええええええええっ!？こここんな場面で・・・何言ってるのよあんだあ!!」

『い、いや？何をそんな驚いている?』

何でこんなに驚かれたのか、光の人物も素で返す。

一方、ヒカリは手をバタバタさせ、あうあう言いながら戸惑いの表

情を浮かべていた。

「あたしが！？あなたと！？合体するう！？

いやいやいや！有り得ないし！まだ出会って1時間も経ってない女の子と合体したいって、あんただんだけプレイボーイなのよっ！！そ、そりゃああたしも興味ない訳じゃないけど、こういうのはお互いをきちんと知った上であって・・・

って、なんであんたとそういう関係になる事前提にしてんじゃあたしはあ！！」

『・・・何か勘違いしているようだが、とりあえず、受け取れ』

光の人物が腰のベルトに手を翳し、バックル部分を取り外してヒカリに手渡す。

次の瞬間、光の球体となった光の人物がバックルに吸収された。

『これを装着しろ』

「いやいやいや！だから合体って・・・！」

『いいから早くしろ！あいつが起き上がるぞ！』

「う・・・わ、分かったわよ！」

カラス怪人の話を持ち出され、まだ顔を赤くして少し緊張しながらも、言われた通りにバックルを腰に装着。

左右から伸びた光の帯が後部で結合し、白いベルトへと変化した。

「で？どうすればいいの？」

『いや、もう終わった』

「へっ？」

きょとんとしたヒカリの声に合わせるかのように、ベルトから光が溢れた。

光の奔流が渦を巻くようにヒカリを包み込み、その全身に装甲を纏わせる。

その渦は疾風を巻き起こし、周囲に舞っている桜の花を空へと押し上げ、やがて奔流が消えて桜吹雪が周囲に舞い降り、ヒカリが立っていた場所には1人の戦士が立っていた。

先ほどまで光の人物が纏っていた鎧と似ているが、フォームはより女性らしくなり、両手の手甲はより細身が増して肘の方へと伸びている。

鎧は白を基調としているが、首周りや頭部、装甲の一部にヒカリの髪色である亜麻色のラインや装飾が施され、力強さと共に暖かさを感じさせる。

全身に空いた空洞は全部で9個。両足のアングレットに両膝装甲、両手の手甲に2つずつ、そして首後ろから両端に伸びるマフラーの付け根である首元。

頭部は仮面で覆われ、額から左右に伸びる触覚は黄色へと変色。複眼は輝く黄色。まるで闇夜の天空に輝く月を映したような色だ。

ヒカリは今、先ほどまで光の人物が変身していた姿とは少し違う、仮面の戦士へと変貌した。

「これ、って・・・!？」

『その姿の名は『シャイン』。奴らを倒せる、唯一の力だ』

「シャイン・・・」

『小娘え！貴様あ！！！』

自らが変化した『シャイン』の姿に驚くが、林から飛び出してきたカラス怪人が高速で飛翔し、回転しながら右足を叩きつける。

『ヒカリ！『ガード・エナジー』だ！』

「えっ？こ、これ！？」

ベルトから響く光の人物の声に合わせ、左手の装甲を前面に向ける。すると装甲にはめ込まれた『ガード・エナジー』が光を発し、装甲を中心に薄緑のシールドを形成。

先ほど光の人物の壊されたシールドとは違い、逆にカラス怪人の体を押し返した。

『畳み掛ける！』

「オツケー！」

シールドを解除し、体勢を崩したカラス怪人に肉薄。

いつもより遥かに早い速度で踏み込むと、握り締めた右手を全力で叩き込んだ。

地面を削って吹き飛ばされるカラス怪人を横目に、ヒカリは信じられないように自らの手を見た。

「な、何よこの力！？とんでもないわよ！？」

『エナジーの一つ『チェンジ・エナジー』を媒介に奴らに対抗するために生み出された、エナジーの力を利用する戦闘用強化スーツ』マスキドライダーシステム・シャイン』だ。

詳しい説明は省くが、奴らに対抗するためには――』

「これだけの力が必要って訳・・・なるほど、納得！」

声に答え、再び走り出すヒカリ。

その視線の先には、立ち上がって羽根を周囲に展開したカラス怪人の姿が。

『死ねええええっ！！』

両手を一気に振り下ろし、今までで最大量の羽根を一気に振り下ろした。

まるで雨のように漆黒の羽根が舞い落ちる中、ヒカリは停止すると再び左手を構える。

ガード・エナジーによりシールドが生まれて羽根を受け止めるが、その圧倒的な量に少しずつ押されていく。

「こ、のお！」

『右手の『パワー・エナジー』を左の手甲に移動させろ！』
「分かった！」

声に答え、右手の手甲にはめ込まれたオレンジ色の『パワー・エナジー』を取り外し、左手の装甲に空いているもう一つの穴へと押し込んだ。

すると、展開している薄緑のシールドの前面に更にオレンジのシールドが重なり、『守り』のエナジーが『力』のエナジーによって強化され、2重となったシールドは全ての羽根をガードする。

シールドを解除すると共に駆け出し、後退しようとしたカラス怪人に追いつくと得意の乱打戦に持ち込む。

シャインの能力で強化された反射神経と持ち前の運動神経で全ての攻撃をかわし、的確に両拳の乱打を次々と叩き込み、軽く飛んではらの回し蹴りを左の頭部に叩き付けた。

吹き飛ばスカラス怪人と対象に、月明かりと夜桜が舞い散る中、華麗に着地するヒカリ。

カラス怪人もどうにか立ち上がるが、その足元は既に限界に来ていた。

『よし、決めるぞ！パワー・エナジーを！』

「あんたがやったみたいにすればいいのよね!？」

『ああ!全力で叩き込めっ!!』

再びパワー・エナジーを取り外し、先ほど光の人物がやったように指で弾いて空に舞わせる。

右手を突き出し、装甲に空いた穴へと吸い込まれるようにパワー・エナジーが装填。

「はああああっ・・・!」

腕を回転させ、腰を深く落とし、左手をやや前方に構え、右手を握って引き絞る。

パワー・エナジーを装填した右手の手甲が光に包まれて変形し、右手を覆うようなナックルガードに変化。

3箇所の噴射口から光の粒子が溢れ、まるでジェット機のような轟音が響き渡り、握った右手に光が宿る。闇夜に輝く、その名の通り『^光シャイン』が。

やがて直視できないほどの圧倒的な光量が右手に宿り、ヒカリは駆け出した。

同時に右手の噴射口から光が放射され、圧倒的なスピードで突撃。

「でやああああああっ!!」

カラス怪人の懐に入り込み、大地を踏みしめると共に右手を突き出す。

遮る物は何もなく、ヒカリの輝く拳——『シャインバーストナックル』が、カラス怪人の胸に炸裂。周囲に衝撃と光の粒子を巻き起こす。

『が、がああああああっ！！』

カラス怪人の体が吹き飛び、地面に倒れるとほぼ同時に全身に光が溢れ、周囲に響き渡る轟音と共に爆発。

爆発の跡には、カラス怪人の羽根だけが舞い散ったが、やがて霞むように消滅した。

それを見つめるヒカリのベルトから光の人物が飛び出し、ヒカリの姿も粒子が消えていくに合わせて元に戻る。

同時に、ヒカリの視界が突如暗転。全身がとてつもない疲労感に襲われた。

「っ！はあっ・・・はあっ・・・」

前に倒れかけたヒカリの体が止まる。

虚ろな目で上を見上げると、光の人物が体を支えていた。

「あれ、体が・・・」

『説明はする。だが、今は休め』

「う、ん・・・わか・・・った・・・」

視界がぼやける中、光の人物の声を効いたヒカリの意識はそこで途絶えた。

『クロウ・ダークネスが倒された・・・だと？』

どことも知れぬ闇の中、声の主は言う。

クロウ・ダークネス——ヒカリが戦ったカラス怪人が、倒されるはずのない世界で倒された。

その報告に疑問を抱いたのは、声の主の隣にいる女性の声。

『どういう事？あの世界に、私達を倒せる技術があるとは思えないけど？』

『ハッ！所詮下っ端だ下っ端！おかた、『シャイン・エナジー』の光にでも毒されておっちんだんじゃねえのか？』

女性に答えるのは、ガラの悪い声を発する影。

2人を制し、リーダーであろう男が言う。

『その可能性もあるが、まずは事実の確認だ。誰でも構わん、向こうの世界に偵察を出せ。』

万一、我らに相対する存在と技術があるのなら、徹底的に破壊しろ』

男は立ち上がり、暗雲の隙間から僅かに光る月夜にその身を晒した。漆黒の角を抱く馬のような頭部と、身に纏う鎧には3つ首の獣をあしらった装飾。

『我らダークネス、齒向かう者には容赦せん』

そう言った彼の背後の壁には、その名の通り闇を思わせる紋章が刻まれていた。

第1話 光と光の出会い 後編（後書き）

ども、ウェイカップです！

やっと完成しました、第1話後編！

そしてヒカリが初変身！ついに、我がオリジナル仮面ライダーの誕生！

まあ劇中で仮面ライダーって単語出てませんけどw

さて、そんな仮面ライダーシャイン。

劇中でそれらしい外見の紹介はしましたが、書いてて自分でもよく分かりませんw

一応イメージとしましては・・・

『ランスロット（『コードギアス』のナイトメアフレーム）を女性っぽい外見にしてマフラー二つつけた』と考えてくれればokです。

分からない方、ごめんなさい。コードギアスでググってみて下さいw

平成ライダー風に紹介するなら、シャインの戦闘スタイルは『宝玉』エナジー』です。

全身に空いた9箇所の空洞に、複数存在する『エナジー』を装填する事で、装填場所と装填するエナジーに応じた能力が発揮できます。左手の装甲にガード・エナジーを入れれば、エナジーを使用するシールド。

右手の装甲にパワー・エナジーを入れれば、必殺パンチの発動。更に同箇所複数の穴が開いていれば、組み合わせで更なる効力を発揮できます。

今後も多数のエナジーを登場させる予定なので、組み合わせ等も楽しみにしてください。

では、次回も感想をいただければ幸いです。

第2話 ヒカリとライトの決意 前編（前書き）

うお、一月たってしまった・・・！

オリジナル作品の難しさに悪戦苦闘する毎日ですw

ではお待たせしました！

仮面ライダーシャイン、第2話です！

第2話 ヒカリとライトの決意 前編

「・・・う、ん・・・？」

閉じた瞼の奥から届く光に、ヒカリはゆっくりと意識を呼び戻した。両眼をこすって身を起こして背筋を伸ばし、まだ半分しか起きていなかった頭脳を無理矢理覚醒させ、自分の今の状況を把握する。

見慣れた天井とタンスやパソコンといった私物。

見間違えるはずもなく、長年住んでいる自分の部屋であった。加えて、今の服装は愛用しているクリーム色のパジャマ。

シャワーを浴びた記憶は無いので、髪が若干パサついていた。

「あ、れ・・・？」

と、そこでヒカリは自分の昨晚の状況を思い出す。

自然公園の桜の樹の根元でカラス怪人と戦い、自分の姿が仮面を被った戦士に変化した、忘れたくてもしくは忘れないであろう記憶を。

「っ！そうだ、あたし・・・って、あいつは？」

ベッドを抜け出してスリッパを履き、部屋を出て周囲を伺う。

リビング方面から聞こえる声に気付き、多少警戒しながらもリビングへ続くドアを開けた。

そこで見た光景に、ヒカリはしばらく言葉を失う事になる。

「・・・あんたら、何やってんの？」

「あつ、ヒカリ。おっはよー」

「冷蔵庫に入ってた材料使って朝飯作つといたから、顔洗って早く食えよ」

『うむ。朝食はどこの世界でも大事だからな』

幼馴染である少女と少年が、空中にぶかぶか浮かんで言葉を発する光の球体と、友達宜しく仲良くお話していた。

30分後。

シャワーを浴びて眠気を完全に落とし、コウが作ってくれた冷やし中華を一気に腹に詰め込み、爪楊枝で歯をシーシーやるという、もはや色気など完全にぶっ飛ばした体勢でヒカリは問い詰めた。
ちなみに服装は完全な部屋着。

暖かくなってきたことでダンスから引つ張り出したTシャツに、青いデニムスカートとスパッツという恰好だ。

髪の毛も無造作に後ろで止めており、所謂ポニーテールである。

「で！結局あんたは何なわけ！？」

「あんた、女の子なんだからその恰好はどうなわけ？」

『なに？これがこの世界の女子の基本じゃないのか？』

「お前の世界の女子の恰好が見てみたいよ・・・」

コウの呆れたような発言を気にせず、光の球体は何かを考えるかのようにつかつかぶか浮き沈みを繰り返す。

『さて、まずはどこから話そうか・・・』

「てか、あんたの名前は？結局教えてもらってないんだけど」

「あつ、俺達も聞いてないな」

『む、そうか・・・その前に、これを貸してもらっていいか？』

球体が移動し、彼が示したのである。物体の上に止まる。

部屋のオブジェとなっている、ヒカリの父がどこぞの電気街で買ってきた、ロボットの可動フィギュアだ。

なんでも父が昔見ていたテレビアニメに登場してた主人公メカが何かで、ロボなんとか魂とか言ってたような気がする。

「お父さんのだから、壊さないっていうなら構わないけど・・・」
『うむ、善処する』

次の瞬間、球体の光が一瞬輝くと、徐々にロボットへと入り込んでいく。

やがて光の全てがロボットに移ったと思った、次の瞬間。

『・・・うむ、やはり体があると落ち着くな』

光が宿ったロボットが、突然動き出して言葉を発した。

「!？」

「・・・へっ？」

「・・・っ!？」

掌サイズの小さいロボットのおもちゃが、まるで意思を持ったかのようにタンスから飛び降り、てくてくヒカリ達の前まで歩いてくる。その光景に3人が唖然とする中、ロボット——否、光の人物は言った。

『さて、改めて名乗ろう。俺は・・・』

「・・・・・・・・..はう」

「わー！朝陽、すっかりしろおつ！現実逃避すんなあ！！」

「あんた、朝陽に何すんのよ！その頭むしりとるわよ！？」

「いや、ちよつと待て！俺が一体何をした！？」

話が大いに脱線した状態で、4者の喧騒はしばし続いた。

「・・・・・・・・..続けても構わんか？」

「え、ええ・・・・・・・・..ごめんなさい・・・・・・・・..」

10分後。ようやく落ち着いたのか、水を一杯飲み干してから朝陽が告げる。

と言っても、目の前で人間のように動き、どこから声を発しているかが激しく疑問なロボットのフィギュアを前に若干引き気味だが。

「俺の名は『ライト』。何度か言ったと思うが、俺はことは違う別の世界から来た存在だ」

「別の世界・・・・・・・・..ねえ・・・・・・・・..」

「まあ、信じられないと言うのは承知の上だ。だが、俺がこの世界の存在ではないのは、昨晚の出来事で分かっていると思うが？」

「・・・・・・・・..OK。まだ信じられないけど、確かにあれを見たら信じざるを得ないわね」

光の人物——ライトの改めての自己紹介に、ヒカリは半分納得しないながらも肯定する。

一番の理由はライトが言った通り、自身が昨晚体験した戦いだ。

あれだけの人知を超えた出来事を身を持って経験したのだ。信じるなというほうが無理である。

「で、ライト。あんたはどうして、その・・・あたし達の世界に来たの？昨日のカラスの化け物と関係があるの？」

『ああ。あいつらの名は『ダークネス』。俺がいた世界から、ある目的を持ってこちらの世界に侵攻してきた組織だ』

「目的？」

『こいつだ』

ライトの手――ロボットハンドが手を翳し、そこから光と共に宝玉――パワー・エナジーとシールド・エナジー。

そして、まだヒカリが見た事がない白いエナジーが浮かび上がった。それと同時に、同じように光の塊を生み出し、それが終結して一つのバツクルとなる。

「これって、あたしが昨日姿を変えた時につけてた？」

『こいつの名は『シャイン・エナジー』。俺達が研究している、光の力を持つ結晶体だ。』

オレンジは『力』を司る『パワー・エナジー』、緑は『防御』を司る『ガード・エナジー』。

そして白は、このバツクル『シャインドライバー』を通して、装着者の姿をシャインへと変身させる『変化』の力を宿した『チェンジ・エナジー』だ』

「へえ、綺麗ね」

朝陽が率直な感想を言い、エナジーとドライバーは再び光となってライトの体に入っていく。

それを見て、コウが疑問を問いかけた。

「なあライト。お前って、人間じゃないよな？」

今みたいに物を光に変化させたり、お前自身が光になったり・・・気を悪くしたら悪いが、俺達から見たら明らかに化け物だぞ？」

『とは言ってもな。これが、俺達が生きている世界の普通なんだ。俺から見たら、固形化した姿を常に晒しているお前達の方がよっぽど異質に見える』

3人を見渡して首を傾げながら言うライト。

そのままリビングを軽く歩き、周囲を物珍しそうに見回りながら続けた。

『俺達の世界では、生きていくために使う全ての道具に光が使われる。

こちらに来てから若干調べさせてもらったが、お前達の世界でいう車や飛行機といった移動手段、発電機器に代表される、日常で使うありとあらゆるものが、光をエネルギーに変換する『セント』という装置を利用しているんだ』

「つまり・・・全てのエネルギーが、光を使ってるって事？」

『そう考えてもらって構わん。セントそのものは、俺達の世界で遥か昔から使われていたものだからな』

ヒカリの声に答え、ライトは続ける。

『さっきのシャイン・エナジーは、近年になって古い遺跡から発掘された、古代のセントの再現に成功したものだ。

古代のセントは、あれ一つで100年分のエネルギーを楽に越えるエネルギーをまかなっていたらしい』

「あんな小さいので、100年分！？」

『ああ。最近、エネルギー不足に悩まされていた俺達の世界にとって、このシャイン・エナジーはまさに救世主となるはずだった・・・

ところが最近になって、・エナジーを狙う者達が現れた。それが奴ら、ダークネスだ」

ヒカリ達の脳裏に蘇るのは、昨晚のカラス怪人。

明らかに人外の力を持つあの力を思い出し、朝陽の体が少し強張る。

『奴らは誰も踏み入れてはいけない遺跡に勝手に踏み込み、そこに眠っていた古代のセイントそのものを発掘し、それを自分達に直接使用した。』

それにより、奴らは人を超えた文字通りの怪人へと変化していった。俺達の世界の人間は、こちらの世界では姿を固定化する事が出来ないというのは言っただな？

奴らはその法則すら無視し、常に姿を固定化するほどの強力な力を手に入れ、更に力を求めてエナジーを狙った」

「それじゃ、昨日のカラスの化け物って、こっちの世界に来たダークネスが姿を固めたもの……って事？」

『ああ。そして俺達はエナジーを奴らに奪われるのを防ぐため、元々は一つの物体だったシャイン・エナジーをそれぞれの力に偏らせて分離し、こっちの世界に飛ばしたんだ』

「……それって!？」

ヒカリが何かを思い出したかのように廊下に飛び出し、ダンスから数日前の新聞を持ち出してくる。

新聞の一面には『季節外れの流星、光明市に降り注ぐ』との見出し文句が。

「何日か前に街に降り注いだけど、一切被害が出なかったって話題になったんだけど……」

『ああ、こいつだ。エナジーそのものに物体を破壊する力はないからな。街のあちこちに落ちて、そのまま力を眠らせているんだろう。』

エナジーは、持ち主が力を振るうに値する存在だった時にのみ力を発揮する。

お前の戦う決意にチェンジ・エナジーが答えたようにな」

そこまでの説明を終え、一息ついてから立ち上がる。

とは言っても、実際にはロボット人形がむくりと立ち上がるわけで、端から見るとかなり奇怪な光景なのだが。

『さて、そろそろ行くとするか』

「行くつて、どこいくのよ？」

『無論、シャイン・エナジーを探しにだ。

俺の確認している限り、こちらに散らばった数はその紙にも書かれているように全部で20。

俺の手元には3つ。残りの17個のうち、一つたりとも奴らには渡せない』

「・・・あいつらがそれを手に入れたら、どうなるの？」

朝陽の言葉に少しだけ黙っていたが、やがて意を決したように口を開いた。

『力を全て集めて世界を我が物にする。それこそが、あいつらの目的だ』

「世界、つて・・・つまり、俗に言う世界征服・・・？」

『そう考えてもらって構わん。

奴らにエナジーが渡れば、まず間違いなく俺の世界は完全に支配される。

その後、奴らはエナジーの力を使って次々の他の世界にも侵略を開始し、様々な世界が奴らによって蹂躪される。

それだけは絶対に防がなくてはいけない・・・』

口調こそ変わらないが、その声の端々と握り締められた手から、ライトの心が3人に伝わる。

しばらく黙っていたヒカリがやがて口を開き、

「・・・ねえライト」

『断る』

「あたし、が・・・・・・へっ？」

『そう言うだろうと思った。だから先に言っただ。断る』

ヒカリの言葉を予想していたのか、ライトは真っ向からヒカリの言葉を遮った。

しばしの静寂の後、ヒカリがライトに詰め寄る。

「ちょ、ちょっと！全部聞かないでいきなり真っ向から全否定って、あんたどんだけひねくれてんの!？」

『一緒にエナジーを探すのを手伝う。そう言おうとしたのだろう？だから言っただ。断る、と』

「ち、違っわよ!」あたしが散歩してて見つかったら、仕方ないから回収ぐらいはしてあげようかなあ』って言おうとしたのよっ!」

「ヒカリ、さすがにそれ苦しいわよ・・・」

朝陽のツツコミに「うっさい!」と言い返す。

『・・・気持ちは受け取る。だが、これ以上お前達を巻き込む訳にはいかない』

「はあっ!？あれだけ巻き込んでいて、今更『はい、さようなら』って言うつもり!？冗談じゃないわよ!」

『だからこそ言ってるんだ。直接奴らの力を間近で見たお前達なら分かるだろうが、この世界の装備では奴らには通じない。』

奴らに対抗できるのはエネルギーの力。そして、それを用いるシャインの力だけだ』

「だったら、そのドライバーでまたあたしが・・・！」

『ドライバーを使えば、短時間だが俺はこの世界に存在を固定できる。奴らとは俺が戦う』

「あんだ、昨日負けてたじゃないの！」

『・・・まだこの世界に慣れていなかったただけだ。次は勝つ』

「うわ、めっちゃ負けフラグ！」

2人の会話が部屋を支配し、同じような問答がしばし続いた。

取り残された朝陽とコウが口出しできない雰囲気の中、ヒカリが机に手を叩き付けてそっぽを向く。

「ああそう！もういいわよ！さっさと出て行けば！？」

『ああ。言われなくてもそうさせてもらう。世話になったな』

次の瞬間、人形からライトが球体になって飛び出したと思うと、僅かに空いていた窓から外に飛び出していった。

「お、おいライト！朝陽、こっち頼むな！」

「えっ？ちょ、ちよつとコウ！？」

かけていた上着を着込むと、外に飛び出してライトを追いかけるコウ。

残されたのはそっぽを向いているヒカリと、いきなりの事態にため息をつく朝陽の二人だけとなった。

それとほぼ同時刻、光明市の一角にある公園。

普段なら子供達の笑い声が響くこの場所にいるのは、小学生ぐらいの少年が数人。

子供の遊びの定番でもあるかくれんぼの真っ最中だった。

その中の1人の少年は、公園脇にある樹の陰に隠れて鬼である友達を遠くから偵察中だ。

こちらには気付いていないのか、ニヤリと笑って姿を隠す。その時、目の前にある砂場の中に、とあるものを見つけた。

「なんだろ、あれ？」

鬼に気付かれないように砂場の中をかき回し、目的の物を掘り出す。それは少年の小さな掌に納まるほどの、小さめの宝玉だった。

「なんだこれ？ 宝石かな？」

「あつ！ みつけた！」

「あつ、しまったあ・・・」

鬼の視界に入った事に気付き、少年は渋い顔をして同じように見つかった友達の方へと駆け出す。

無意識のうちに、拾った『銀色』の宝玉を自らのポケットに入れたままで。

そして、その上空の青空が少しずつ歪んでいるのに、少年達は誰も気付いていなかった

「なあライト・・・」

『ついてくるな』

「いやお前、俺のネックレスにくっついてるって事分かってるか？」
『・・・・・・・・』

コウの言葉に黙り込む『銀色のネックレス』。

泉家から飛び出したライトに追いついたコウは、どうにかしようと手元にあつたネックレスをぶん投げた所、光球にぶつかったと思うとライトの体はネックレスに吸収された。

どうやらまだ回復しきっていないのか、結局ネックレスにくっついたままでコウの首元にぶら下がっているのである。

コウはそのままヒカリの元へ戻ろうと思ったが、っ少しだけ街をぶらっついていた。

しかし、ネックレスに向かって独り言を言っているような姿を衆目に晒すのは避けたかったので、現在は人通りの少ない裏道を通っている。

幸い今の時間は人通りが無く、安堵してからライトへと言葉をかける。

「あのさ、ヒカリの事だけど・・・」

『くどいぞ。俺の答えは変わらない』

「だったら何で昨日は、ヒカリにその力を貸したんだ？」

コウの言葉にライトは言葉を返さない。

「俺達が公園に着いたのは、そのシャインの力でヒカリがダークネスを倒した後だ。」

素人目の俺達から見てもヒカリはかなり衰弱していた。

戦った事による疲労って言うより、何か別のものに体力そのものを奪われたような感じだった」

『・・・いい観察眼だな』

「人の動きを見るのには慣れてるからな。

それに、ヒカリとはずっと一緒だったんだ。あいつの状態ぐらい、一目見ればすぐ分かる。で、どうなんだ？」

横の自動販売機から飲み物を取り出し、口に運んでから続ける。

少しの沈黙の後、ライトが観念したようにため息をついてから口を開いた。

『・・・シャインのマスクドライダーシステムには、一つだけ致命的な欠陥がある』

「欠陥？」

『ああ。あのシステムは・・・』

その続きを言おうとした瞬間、2人は共に口を閉じる事になる。

突如、道の向こうから悲鳴が聞こえてきたからだ。

同時にコウのネックレスに光が溢れる。

『この気配・・・くそっ、ダークネスかつ！』

「お、おい、ライト？」

『すまん。やはり俺は1人で・・・！』

「待てっ！俺がそこに連れて行ってやる！」

『何・・・？』

予想に反した言葉にライトが驚く。

そのままネックレスを眼前に近づけ、コウは強い瞳でネックレスを、ライトを真っ向から見た。

「この街は俺の街だ。その気配のある場所さえ教えてくれれば、大体の位置は分かる。闇雲に気配だけであてもなく動くより、よっぽどマシだろ？」

『だが、俺は・・・！』

「お前がエナジーを集めたいように、俺だってこの街の人が泣いてるのなんか見たくないんだよ。ヒカリだって朝陽だってそうだ。

仮にお前が1人ですっ飛んでいっても、絶対に逃がさないからな」

『・・・』

目の前の真剣な眼にライトが黙る。

やがて再び悲鳴と共に爆発のような音が響き渡り、コウはライトの返事を待たずに駆け出した。

「くそっ！どこだ・・・！？」

『・・・ここから1キロほどの距離に、子供が遊ぶような場所と大きな建物はあるか？』

「子供？」

耳に聞こえてきたライトの声に、走りながら返す。

『一つに聞こえるが、3つの悲鳴が重なっていた。高さから見て、おそらく全員が子供だろう。』

その後の爆発音は高い位置から聞こえる。ざっと14階ほどだ。どうだ？』

「・・・ああ、団地に隣接した小さい公園がある！どこからどう見ても子供の遊び場だっ！飛ばすぞっ！」

目的地を定め、コウはスピードを上げる。

それと同時にポケットから携帯を取り出すと、リダイヤルから一つ

の名前を見つけて通話ボタンを押した。

「・・・ねえ、ヒカリったら・・・」

「・・・」

「ライト、追いかけていいの？」

「・・・」

「冷蔵庫のケーキ、食べていい？」

「食べたら全力で叩きのめす」

「あつ、そう・・・」

泉家のリビングにはどんよりとした空気が充満していた。

空気の発生源である現在の家主は、いかにもどよんとした表情で体育座りで低い声を返す。

それをリビングの反対側から見ている朝陽は、盛大にため息をついた。

もちろん、目の前で座り込んだ亜麻色の髪の毛の幼馴染に対してである。

こうなった時のヒカリはテコでも動かないというのは百も承知だ。

伊達に長年幼馴染をやっていない。

どうすべきかと思案した時、机の上に投げ出されていたヒカリの携帯電話がメロディを鳴らした。

「ヒカリ、携帯よ」

「・・・」

「もう、出るからね・・・って、コウだ」

ディスプレイに表示された『鈴木^{コウ}洸太』の文字を読み上げ、ヒカリが僅かに反応した。

それを横目で確認しつつ、通話ボタンを押す。

「コウ？あたしだけど」

『朝陽か！？ヒカリは！？』

「うーん、まだちょっとね・・・そっちは？」

『いいから代わってくれ！』

「な、何よ。どうしたのかしら・・・？」

コウの叫ぶような声に疑問を抱きながら、自分にも聞こえるようにスピーカーのスイッチを押し、リビングの机の上に置く。
その直後、部屋にコウの叫びが響いた。

『ヒカリ聞こえるか！ダークネスだ！！』

「っ！？」

『今、ライトと一緒に向かってる！場所は西地区の住宅街の中の公園だ！遊んでた子供達がダークネスに襲われてるらしい！』

「子供が！？」

『ああ！とにかく、俺はこのまま向かう！』

電話の切れる音と共に、部屋に落ちる静寂。

次の瞬間、ヒカリはいきなり立ち上がるとバイクの鍵を持って外に飛び出し、すぐにエンジンを駆けてアクセルを入れる。

だが、その前にいきなり朝陽が割り込んできた。

「ヒカリ！私も一緒に行く！」

「朝陽・・・！」

「行くんでしょ！？コウも行ってるのに、私だけ待ってるなんてイ

「ヤ！お願い！！」

「・・・乗って、飛ばすわよ！」
「うん！」

予備のヘルメットを受け取り、バイク後部に座ってヒカリの腰に手を回す。

それを確認し、ヒカリは一気にアクセルを全開にして疾走した。

第2話 ヒカリとライトの決意 前編（後書き）

ども、ウェイカップです！

前書きでも書きましたが、遅れてしまい大変申し訳ございませんっ

！！（土下座

改めてプロットを呼んでみると、出るわ出るわ食い違いw

おかげでプロット上の重要部分を書き直す事になり、大幅に時間をとられてしまいました・・・

今回は光の人物「ライト」の名前お披露目、そして彼がどういった存在なのかの説明回です。

もつと面白く書けたらいいのですが、如何せん文才が・・・！

全体的に説明文が多く、読みづらかったら申し訳ありません。

代わりに、次回は存分に暴れさせます！ええやってやりますともつ！！

またシャインの能力の要でもあるシャイン・エナジーは、今回記載したように全部で20個です。

既に3つ（チェンジ・パワー・ガード）が登場し、次回もちろん新エナジーが登場。

どんな能力か、そしてどんな組み合わせが飛び出すか、ご期待ください。

では、次回もご感想お待ちしております。

第2話 ヒカリとライトの決意 後編

公園で遊ぶ少年が、砂場から一つの宝玉を見つけた時。

その上空が、突如歪んだ。

歪みは徐々に漆黒の色を灯し、その中心部が少しずつ突き出してくる。

やがてガラスが割れるような音と共に、歪みから飛び出してきた漆黒の姿が公園に降り立った。

遊んでいた子供達、そして通りかかった近隣の住人がその姿を目撃する。

黒を基調としながらも、所々に見られる黄色のラインの体色。

生物のような筋骨な節々、巨大な口の意匠が目立つ漆黒の鎧、そして両腕に生やした黄色の爪。

頭部からみえる口元には、あらゆる物を噛み砕く力を秘めた鋭利な牙。

虎を模したダークネス『タイガー・ダークネス』が、世界を超えて降り立った。

着地したタイガー・ダークネスは、立ち上がると周囲を見渡して何かを探す素振りを見せる。

周囲の人々は、その姿を見てひそひそと聞こえないように話し出す。

そんな中、タイガーは1人の人物に視線を向けると鼻をヒクヒク動かす。

鼻の先には、先ほどまで友達とかくれんぼで遊んでいた少年だ。

『……見つけたあっ！シャイン・エナジー！』

突如声を張り上げると、口からいきなり漆黒の火炎弾を吐き、少年の背後にあったジャングルジムに命中すると爆発。

突然の事に人々はしばし呆然としていたが、やがて我先にと公園から逃げ出す。

それはもちろん少年達も例外ではなかったが、タイガーは目にも止まらぬ速さで公園を駆け抜けけると少年達の前へと立ちはだかった。

「う、うわあああつ!!」

「化け猫だああつ!!」

『あつ?猫?確かこの姿って、こっちじゃトラとか言われてたよな・
・まつ、いいか』

見かけによらない軽口をあげると、座り込んで泣き喚く少年達の眼前に座り込む。

『とりあえず、うるせえから泣き止めや。な?』

「う、うわあああんつ!!」

『・・・泣き止めて、言ってるだろうがよあつ!!』

従わない少年達に怒声を上げ、爪を少年の足元に突きたてた。

わずか数センチ先の地面に突き刺さった事実に関付き、少年達が一斉に泣くのを堪える。

『よおしよおし、最初からそうしてりやいいんだよ・・・で、そこ
のガキ』

「・・・ぼ、僕・・・?」

『ああ、お前だお前。んじゃ、さっさとエナジー出せよ。そうすり
や全員逃がしてやる』

爪を引っ込めた手をクイクイ動かし、少年に催促する虎の化け物。
端から見ると異様な光景である。

だが、少年は恐怖感からか、普段の何倍もの速さで首を横にガンガン振り回した。

「し、知らないよ！」

「あつ？何言つてんだ。お前エナジー持ってたんだろうが」

「だ、だって！知らない物は知らないんだよお！」

再び泣き声をあげようとした少年の前で、タイガー・ダークネスは右手を突如振るった。

備わっている爪から生み出された刃状の漆黒の衝撃が公園を横切り、周囲の大木を一発で切り裂き、その向こうにある団地の高層階に命中して爆発。

「あゝあ、せつかくの自然がお前のせいでぶっ壊されたあ」

「そ、そんな・・・」

「今のはわ・ざ・と！他の人間がいない場所を狙った。次はどうなるか・・・分かってるよなあ？」

手を伸ばし、少年から目的の物を受け取ろうとする。

だが少年は座り込んだまま、ガタガタ震えるだけだ。

タイガーは一度だけ舌打ちすると、再び爪を少年に向け、

「仕方ねえ。面倒くせえが、てめえの体ズタズタにしてから探す――」

タイガーが爪を振り上げ、振り下ろそうとした刹那、少年は自分の顔を覆うように腕を掲げて目を瞑った。

だが、いつまで待っても少年の頭上に、命を奪う刃は振り降りてこ

ない。

恐る恐る目を開けると、誰かの背中が見えた。

その背中の主——交差させた両手を光で包んだ鈴村洸太は、足を踏みしめてタイガー・ダークネスの手を押さえつける。

「ライトオー！」

コウの声に答えるかのように、右足の膝・・・正確には、コウが履いているジーンパンの膝部分の布に光が宿り、勢いよくタイガーの腹に叩きつけ、そのまま光る拳を腹部に叩き付けた。

たまらず吹き飛ぶが、少し離れた場所で地面を削って着地するタイガーが、目の前のコウを睨みつける。

「その光・・・てめえ、エナジーをバラバラにした野郎か！？」

「ダークネス！貴様、何が目的だ！？この子供は関係ないはずだつ！！！」

「関係ない？はっ！ご自慢のエナジーの気配察知もできねえのか！？そのガキはなあ、エナジーの一つを持ってるんだよお！！！」

「エナジーを・・・！？君、本当か！？」

「し、知らないよお！そのエナジーって何なんだよお！！！」

「まだ言うか、このガキがあっ！！！」

立ち上がったタイガーが爪を構え、少年へと一直線に駆け出す。

コウが両手に巻いた布にライトがエナジーの力を与え、少年の前に立ちはだかった。

「邪魔だ！どけえ！」

「っ！君、とにかく逃げるんだ！」

迫る鋭利な爪をどうにかわし、少年に逃げるように指示するが、少

年は座り込んだままで動けずにいる。

それを見てから、コウはタイガーの動きに全神経を集中した。守る対象は動けず、ここで戦えるのは自分だけ。

ならば、彼がここで取る手段はたった一つ。

「俺が、こいつを倒す・・・！」

迷うはずも無かった。

そうと決めれば、後は自分の得意な戦術に持ち込むだけだ。

コウの空手におけるスタイルは、とにかく相手の動きを視ること。腕、足、胴体、関節、頭部、相手の全身のあらゆる動きを、一つの動きも逃さずに確認し、その計算から導いた場所へと攻撃を叩き込む。

失敗も多いが、それでも成功する確率の方が高い。

それが、鈴木洸太の戦い方であった。

相手が例え異形の化け物であろうと関係なく、コウはライトに靴を強化してもらい、動きを更に俊敏にする。

高速で迫る攻撃をかわし続け、相手の動きをとにかく視る。

（動きは早いけど、ついていけない訳じゃない！

ライトが足を強化してくれてるから、スピードも負けてない！

そして、こいつの弱点は・・・！）

『がああああっ！！』

攻撃が当たらない事に憤怒し、タイガーの大振りな爪が振り下ろされた。

コウは僅かに横に移動し、爪を最小限の動きでかわすと、地面に突き刺さったタイガーの右手を踏みつけて動きを止める。

「その、爪だあっ!!」

もう一つの足で爪にかかと落としを叩き込み、根元から叩き壊す。たまらず右手を押さえるタイガーの隙を突き、流れるような連続キックを胴体に叩き込み、最後に腰を屈めた正拳突きを叩き込んだ。完全に油断していたのか、ダメージを受けた腹部と右手を押さえてタイガーは後退する。

それに追撃をかけようと、コウは地面を踏みしめて一気に接近。未だに光を放つ右手を構えるが、

『ぐっ・・・!?!』

「ライト!?!」

ペンダントから響くライトのうめき声と共に、構えた右手から光が消失する。

コウが驚きの声をあげると、目の前のタイガーが右手を構えたのはほぼ同時だった。

根元からポツキリ折れている爪に闇が集まっていく。

やがて集まった闇は、先ほどまでそこにあった物——爪の形を形どると、瞬く間に再生した。

完全に動きを止めてしまったコウの胸に爪を振り下ろし、一瞬の判断でコウは地面を蹴って後退し、爪の攻撃範囲から離れる。

『・・・ちっ、掠っただけか』

「あ、ぐっ・・・!」

タイガーの言葉と共に、胸を押さえて膝をつくコウ。

押さえた胸にタイガーの爪が掠ったのか、僅かだが赤い模様・・・

血が吹き出ていた。

決して致命傷ではないが、痛みで集中が途切れてしまう。

その隙をつき、いつのまにかコウの眼前に立っていたタイガーがコウの胸倉を掴んで、その体を楽に持ち上げていた。

『ラッキーだな。お前の持つエネルギーも頂いていくぜ！』

『くっ！コウ、逃げろ！！』

再生した右の爪を構え、コウに向けて右手を引き絞って突き出す。

その瞬間、公園に響き渡る排気音。

座ったままの少年の横を高速で駆け抜けたその音の発生源は、横からタイガーに向けて激突し、タイガーの体を吹き飛ばした。

『があああつ！？』

音の発生源である白いバイクは、砂煙を立てて公園内に停止。

跨っていた2人の人物——ヒカリと朝陽がバイクから降りると、タイガーから解放されて倒れたコウへと駆け寄る。

「コウ！大丈夫！？」

「お、俺は大丈夫だ・・・ぐっ・・・！」

ヒカリが肩を貸して立ち上がらせた時、胸元のネックレスから光――

――ライトが飛び出してきた。

『じつとしてる』

そう言うと、コウの頭上を旋回する。

旋回した事で生み出された光の円から粒子が舞い降り、コウの体を

包み込んだ。

するとコウの傷ついた胸に淡い光が灯り、その傷をみるみる塞いでいき、コウの傷は5秒もしないうちに完全に塞がった。

「これ、昨日の夜と同じ・・・!？」

『エナジーをお前の体に流した。ある程度の傷ならこれで治せる・・・っ!？』

驚くコウに答えると、突如ライトの球体の光が弱くなったと思うと、地面に落ちていく。

咄嗟にヒカリが両手を包み込むように差し出し、ライトを両手で受け止めた。

「あんだ、まだ体が・・・!」

『っ、どいてろヒカリ・・・奴とは、俺が戦う・・・!』

「そんな体でどうするって言うのよ!昨日みたいに、あたしが!」
『周りを見てみる!!』

ライトの声に周囲を見渡す。

コウと同じように、光明市の地理を大体は把握しているヒカリは、もちろんこの公園の場所や景色も知っていた。

だが今のこの公園で見える景色は、ヒカリが知る景色ではない。

周囲の建物には破壊の跡が残り、公園を囲む木々は倒れ、破壊された事で炎が舞い、後ろには涙を流す子供。

『これがお前が入ろうとしている世界だ・・・!これを見て、まだ戦うなんて言っていられるか!』

「っ!」

『それに・・・お前にこれ以上、シャインの力は使わせられない・・・!』

「どういつ、こと？」

質問を返した朝陽の言葉にしばし沈黙するが、やがて意を決して口を開いた。

『シャインのマスクドライダーシステムには、装着者を選別するシステムが備わっている。

ダークネスのようにこの力を狙う奴らからシステムを守るための措置だが、登録者以外にシステムを使った者がいた場合、その生命力を吸い取ってしまうんだ』

「生命力・・・？それじゃあ、昨日ヒカリが倒れたのって・・・！」

『俺が強制的に装着を解除したから、あれだけで済んだんだ。

これ以上お前がシステムを使えば、お前の命は・・・』

ライトはそれ以上の言葉を言わないが、ヒカリ達はライトの言葉んとしている意味が分かった。

その時、吹き飛ばされたタイガーが再び立ち上がり、ヒカリ達を睨みつける。

『貴様らあ！』

『くっ・・・お前達、その子供を連れて逃げろ！』

ライトがヒカリの手から浮かび上がり、球体からシャインドライバーが飛び出した。

そのままドライバーに重なるうとした時、ヒカリが間に右手を入れてドライバーをキャッチして奪う。

『ヒカリ！？』

「ライト。装着者の登録ってここで出来るの？」

逆に質問を返すヒカリの言葉の意味を即座に理解したライトは、詰め寄って言葉を浴びせた。

『お前、俺の言った意味が分かっているのか!?!』

「分かっているわよ。あんたがあたしを守ろうとして、1人で戦おうとした意味もね」

『だったら!』

「この景色を見ろって言ったわよね」

ヒカリは再び周囲を見渡す。

いつもは子供の笑い声と木々の音が響く綺麗な公園が、壊されている。

ヒカリの左手は無意識の内に強く握られる。

「あたしはこの街で生まれ育った。この街が大好きなの。これから受験とかもあるし、先の事なんて全然決めてないけど、今やりたい事はハッキリしたわ」

ドライバーをライトに突きつけ、まっすぐその姿を見つめた。その瞳には一切の迷いは無く、その言葉には強い意志が込められる。

「あたしは、あたしが大好きなこの街を守りたい！」

街に散らばったエナジীরせいでダークネスが街の人たちを襲うって言うなら、あたしはあんたに協力してエナジীরを全て集める!」

『ヒカリ……!』

「だから、お願い!あたしに力を貸して!」

もはやどんな言葉をかけても答えは同じだろう。

ライトはしばしの沈黙の後、ドライバーへ入っていった。

『マスクドライダーシステム・シャイン、装着者変更システム起動』
ライトの声に答えるかのように、ドライバーから光の線がヒカリの全身をスキャンしていく。

やがて光が収まり、ドライバーの中央部が一瞬だけ輝いた。

『これで、後はお前がシャインになれば登録は終わる』

「ライト……！」

『あれだけ言っただ。エナジーを全部集め終わるまで付き合ってもらうぞ』

「いいわよ、覚悟決めたわ！やってやるわよ！！朝陽、コウ、その子お願い！」

「ああ！」

「ヒカリ……気をつけてね！」

コウが少年を担ぎあげ、朝陽と共に走っていく。

残されたヒカリは、こちらに駆け出したタイガーを睨みつけると、ドライバーをいきなり空に放り投げた。

タイガーが繰り出した右の爪による攻撃に対し、逆に踏み込む事で懐に入り込んで肘打ちを叩き込む。

もちろん、ライトによってエナジーの力を衣服に宿した状態でだ。

自らの突進の力も合わさった攻撃の直撃を受けたタイガーは胸を押さえ、ヒカリは手を空に掲げてドライバーをキャッチ。

そのまま体を回転させ、タイガーの頭部へとハイキックを叩き込んだ。

直撃の瞬間、肘から右足の靴へと意向したエナジーの力を炸裂させ、タイガーの体は空を舞って公園の端へと吹き飛ばされる。

『て、めえ……！』

「あたしは警察でもなんでもないし、あんたを裁く権利なんて持てないわ。でもね・・・」

ヒカリはタイガーの方へと歩み、公園の中央で立ち止まる。

その瞳には迷いはなく、そこに見えるのは力強い意思を秘めた瞳。

「あんた達がこの街を傷つけて、住む人たちを悲しませる闇だって言うなら、絶対に許さない！」

あたしが・・・うつん、あたし達が！あんた達を倒す光になる！」

手に持ったシャインドライバーを腰に装着。光が延長し、ドライバ―がベルトとなる。

同時に右手に光が溢れ、変化の力を宿した『チェンジ・エナジー』が出現。

右手の親指を弾き、空に舞うチェンジ・エナジー。

それを左手でキャッチし、右手をドライバーの上部へと翳し、人差し指と中指でエナジーを挟んで眼前に突き出した。

そしてヒカリは言葉を叫ぶ。

チェンジⅡ変化。自らの『身』体を『変』える、その言葉を。

「変身！」

左手のエナジーをドライバーの中央部『エナジー・サークル』へ、流れるような動きで装填し、ドライバーから光が溢れた。

光はヒカリの全身を包み込み、その体に白い装甲を纏わせていく。溢れた光は直視できるものではなく、タイガーはもちろん、離れた場所で見ている朝陽達も目を覆った。

「はっ！！」

やがて光の中心点にいたヒカリは、両手を強く左右に広げ、同時に光が弾ける。

そこに立っているのは、首元から二つの白いマフラーをなびかせる仮面の戦士。

ヒカリは二度目の装着・・・否、変身を果たした。

『登録完了を確認。これで今から、お前がこのマスクドライダーシステム・シャインの装着者だ』

「・・・長つたらしいわね」

『はっ？』

「長いつて言ったのよ。その、マスクドなんとか・・・って言うの？
そうねえ・・・マスクでしょ、それにライダー・・・」

しばし腕を組んで考えると、思いついたように手を打った。

「仮面ライダー・・・『仮面ライダーシャイン』って名前で、どう？」

『仮面ライダーシャイン・・・まあ、マスクドライダーシステムよりは覚えやすいな』

ヒカリが思いついた言葉に、まんざらでもない口調で言葉を返す。
その態度を余裕と解釈したのか、タイガーが爪を構えて突っ込んできた。

『なあにおしゃべりしてやがる！女が俺達に勝てるかあ！！』

「あいにく、こつちの世界は男女平等よ！それに今のあたしは、仮面ライダーシャインって呼びなさい！」

『ほざけえ！！！！』

タイガーが爪を構えて突進し、連続でヒカ리를切り裂こうとする。ヒカりは爪による攻撃をかわし、空いた頭部に拳を叩きつけた。シャインに変身した事で強力なパワーを得たヒカ리의拳の直撃を受け、たたらを踏んだ隙に右手を掴むと、爪の上から手刀を叩き込んで根元から叩き折った。そのまま流れるような動きで回転し、左手の爪に回し蹴りを叩き込んで粉碎。

『うおっ！？』

「よし、このまま一気に！」

「ダメだ！ヒカリ、下がれ！！」

攻撃手段を壊した事で突っ込もうとしたヒカ리의背中にコウが声をかける。ヒカリが振り返った瞬間、タイガーは先ほどのように爪に闇を集めて再生、その背中を切り裂いた。

「きゃっ！？」

『無駄無駄あ！こっちは何度でも生やせるんだよお！！』

『ヒカリ、防げ！！』

両手をヒカリに向けると、生やした爪が分離して爪状の弾丸と化す。ヒカリはライトの声に従い、シャイン・ドライバーに手を翳して飛び出した光をキャッチ。

光は薄緑のガード・エナジーとなり、左手の装甲の穴『エナジー・ホール』に装着。

エナジーのシールドを展開して防ぐが、再び爪を生やしたタイガーの一撃がシールドを粉碎し、再び攻撃を受けた。

「ああつ、ヒカリが！」

「くそつ、再生なんて反則だろっ！」

一方、離れた場所からその光景を見ているしかない朝陽とコウ。防戦一方となったヒカリを見つめる事しか出来ない中、2人と一緒に避難した少年が呟く。

「ねえお兄ちゃん。エナジーって、あの小さい石の事？」

「あ、ああ。そうだけど？」

「・・・これがあれば、あの化け物倒せるの？」

少年がポケットから取り出したのは、銀色の宝玉だった。それを見た2人が目の色を変える。

「君、それ・・・！」

「ご、ごめんなさい。エナジーって何だか分からなくて・・・」

「ううん、いいのよ。よく守ってくれたね、ありがとう」

「うん。これで、あの化け物倒して！」

朝陽が笑顔で少年から銀色のエナジーを受け取り、コウと顔を見合わせた。

『そらそらあ！もつと生やせるぜえっ！！』

タイガーが再び爪を発射し、ヒカリはギリギリでそれらをかわすが、先ほどと同じように爪を再生したタイガーが両手を交錯させて切りかかる。

ヒカリは咄嗟にタイガーの腕を掴んで攻撃を防ぐが、力で負けているのか徐々に押されていた。

『ヒカリ！パワー・エナジーで吹き飛ばせ！』

「この状態で・・・出来る訳、ないでしょうがっ・・・！」

少しでも力を抜けば、その瞬間に爪で切り裂かれるのは明らかだ。そうでなくても、徐々にヒカリの体へと迫るタイガーの爪。爪の先端がヒカリの体に触れようとしたその瞬間。

「だあああああっ！！！」

横手から聞こえた声と同時に、公園を疾走する白いバイク。

跨っているコウがスピードを落とさず、横手からタイガーに突撃しようとしたが、同じ攻撃は受けないとタイガーは一瞬早く後退する。コウはバイクを滑らせるように方向転換すると、膝をついたヒカリの傍まで寄ると、後部座席に座っていた朝陽がヘルメットを外してヒカリに駆け寄る。

「朝陽、コウ！？」

「ヒカリ！ライト！これ使って！」

朝陽が差し出したのは、少年から受け取った銀色のエナジーだ。ヒカリがそれを受け取り、ドライバーから響くライトの声。

『それは・・・!?!』

「あの子が持ってたの!使える!?!」

『ああ、これなら・・・ヒカリ、右手にセットしろ!』

「分かった!2人とも、下がって!」

立ち上がったヒカリが、受け取ったエナジーを右手の装甲に空いた
『エナジー・ホール』に装着。

すると装甲から銀色の光が溢れ、展開して握り手の部分が出現し、
それを左手で掴んで一気に引き抜いた。

現れたのは、光の刀身と銀色の柄を持つ両刃状の剣だ。

「光の、剣・・・!?!」

『それは『斬撃』の力を宿した『スラッシュ・エナジー』だ!それ
を使って、奴の爪ごと切り裂け!』

「え、えと・・・!」

ライトの声が響くが、ヒカリは出現した剣『シャイン・スラッシュ
ー』を持ったまま、何故かあたふたしている。

『・・・どうした?』

「あたし・・・剣なんて使った事ないわよお!」

『ん な っ !?!』

『隙ありい!!』

タイガーが爪を構えて突進し、連続で迫る爪の攻撃をどうにか刀身
で防ぐ。

しかし、その動きは実にぎこちなかった。

足さばきこそ空手で慣れ親しんだ動きだが、両手で構えているシャ
イン・スラッシャーを一度もまともに振っていない。

それもそのはず。彼女は格闘技こそ覚えてはいるが、剣術に関して

は全くのド素人なのだ。

『とにかくやれ！今更出来ないなんて通じるかあ！』

「あんた鬼かあ！もう、どうにでもなれえ！！」

戸惑いながらも慣れない手つきでシャイン・スラッシャーを振るい、タイガーの爪と拮抗するが、やはり獲物に慣れ親しんだタイガーの攻撃に対して防戦一方だ。

このままでは、近い時間に確実に攻撃を受けてしまう。

その時、ヒカリが手の中で光るスラッシュ・エナジーを見ると、何かを思いついた。

拮抗した状態でどうにか蹴りを入れて距離を取ると、シャイン・スラッシャーを右手に戻してスラッシュ・エナジーを取り外す。

脳裏に浮かんだ疑問を確信に変えるために、ライトに問いかけた。

「ライト、これって『斬る』力を持ったエナジーなのよね？」

『ああ、そうだが・・・』

「だったら！」

ライトの返答は、ヒカリの閃きを確認に変える。

スラッシュ・エナジーを指で弾き、右膝のエナジー・ホールに装着。右足全体に銀色の光が宿り、右足の色が白から銀色へと変化した。

『お、おいヒカリ！？』

『ハッ！色が変わっただけじゃねえかあ！！』

タイガーがその隙を突いて爪を射出し、空を舞う爪が再びヒカリに迫る。

ヒカリは右足を後ろに一步下げて構えると、エナジーを装填した銀

色の右足を振りぬく。

振りぬいた空間に生まれたのは、装甲と同じ色をした銀色の閃光の刃。

閃光は迫る爪に衝突すると、全ての爪を真っ向から切り裂いて消滅させた。

スラッシュ・エナジの力を宿した事により、右足全体に『斬る』能力が宿ったのだ。

『なにいつ！？』

『予想通り！』

エナジの力を宿した右足を主軸に、タイガーに連続の回し蹴りを叩き込む。

右足に宿った切れ味はタイガーの爪を遥かに凌駕しており、再生させた爪を片っ端から蹴り壊していく。

左足をタイガーの腹に叩きつけ、戻す反動を利用した高速の回し蹴りを振るい、ガードした腕ごとタイガーの体を切り裂いて吹き飛ばした。

『があっ！』

『よし！』

『とどめだ！全力で叩き込めっ！！』

ドライバーから出現させたパワー・エナジを指で弾き、前に突き出した右足のアンクレットへと装填。

アンクレットが形を変え、後方へと伸びる2本の噴射口を持つ装甲へと形状が変化。

力を宿した右足を踏みしめ、右足の先端に集まっていくオレンジの閃光。

ヒカリはタイガーに向けて突進し、そのままジャンプして空中で前

方に回転すると、光る右足をまっすぐ突き出す。

「てやあああああつー!!」

咆哮と共に噴射口から溢れる光の粒子が、ヒカリの体を空中で更に加速させる。

一気にスピードを増したヒカリの輝く右足飛び蹴り——『シャインストライクキック』が宙を貫き、タイガーの体に命中。

タイガーの体は宙を舞い、地面に倒れるとのヒカリが着地するのは同時だった。

『て、てめえ……何者だあ……!!』

「言っただしょ、あたしは……仮面ライダーシャイン!」

『仮面ライダー、だと……ぐ、ああああああつー!!』

その言葉を最後に、タイガーの体に光が集まっていき、轟音と共に爆発した。

数分後。

近所の住民から連絡を受けた警察が公園に到着し、現場検証を行っていた。

そこで彼らが見たのは、鋭い何かで切り裂かれた木々と隣のマンションの壁に残った破碎跡。

そして、公園の中央付近に残っていた、何かの爆発の跡であった。

近隣住民が野次馬となって公園を囲む中、そこから少し離れた路地

から公園を見る3人。

警察が調べている爆発跡を生み出した張本人であるヒカリと、朝陽にコウであった。

ヒカリが寄りかかるバイクの上には、朝陽が持ってきていた泉家のロボットのフィギュアが置かれており、そこにライトが憑依している。

『しかし、また派手にやったなお前は。人知れずエナジーを集めようと思っていた俺の計画は、全てパーだ』

「ま、まだ力に慣れてないだけよ。これから色々教えてもらうからね」

シャインとして戦う事を決意したものの、彼女はエナジーの事やダークネス。そして、ライトの事すらほとんど知らないのだ。

故に、これからは色々な事をライトから教えてもらわなくてはならない。

その時、野次馬から抜け出した1人の子供がヒカリ達を見つけると、笑顔を見せて駆け寄ってきた。

先ほどの戦いの中、タイガー・ダークネスに狙われ、スラッシュ・エナジーをヒカリ達に渡した少年であった。

「仮面ライダーのお姉ちゃん！」

「おっ、元気だね。怪我はなかった？」

「うん！」

少年は笑顔で答え、ヒカリはポケットから銀色のスラッシュ・エナジーを取り出した。

「ごめんね。君が見つけたこれ、使わせてもらっちゃって。こ

れなんだけど・・・」

「・・・いいよ、お姉ちゃんにあげる！」

少年の発言にヒカリは目を丸くした。

元々彼が見つけたこのエナジー。てつきり「それ僕のだから、返してー！」などと、泣きつかれるものと思っていたからだ。

「あいつら、またやってくるんでしょ？それがあれば、お姉ちゃんはいつらに勝てるんだよね？」

「うん、絶対に負けないわ！」

「ああ。何しろこのお姉ちゃんは、仮面ライダーだからな！」

「ちよ、ちよっと。朝陽、コウ？」

「うわあ、凄いなあ！」

朝陽達の言葉を真に受けて、少年はキラキラした純粋な瞳でヒカリを見つめる。

恥ずかしそうに頬を掻きながら、ヒカリは膝を折って少年と視線を合わせた。

「それじゃあ、お姉ちゃんと約束。あたし達の事、他の人には黙っておいてもらえる？」

「えっ、なんで？」

「うん・・・ほら、あんな化け物があるってみんなが知ったら、みんな怖がっちゃうでしょ？」

みんなが傷つかないように、あたし達があの化け物を倒してあげるから。約束、できる？」

「うん、分かった！」

「よおし、いい子だ！」

その時、少年を呼ぶ母親らしき女性の声が聞こえると、少年は振り

返って走り出した。

途中で振り返り、ヒカリ達に向けて手を振る。

ヒカリもそれに気付いて手を振り返し、やがて少年は女性と共に別の路地へと消えていった。

「あたし、守れたんだね・・・あの子の笑顔」

「何言ってるんだ。お前だけじゃなくて、俺達全員で守ったんだろ？」

「そうそう！あたし達、凄い事したんだって！」

路地に消えた少年の笑顔を思い出し、3人の顔に笑みがこぼれた。

一方、バイクの上で座るロボットフィギュアとなっているライトは、3人とは違う感情の言葉をぶつけた。

『改めて聞くが、今ならまだ間に合うぞ。やめるつもりは・・・』

「あんた、今更それ聞くの？もう分かってるんでしょ、あたし達の答え」

ライトが3人の顔を見回し、朝陽もコウも首を縦に振る。

どんな言葉を言っても、3人から返ってくる返事が変わる事はないだろう。

ライトはようやく観念し、腰に手を当てて話す。

『そうだな・・・全く、我ながらとんでもない奴らと出会ったものだ』

「あつ、ひどいわね。あたし達が化け物みたいじゃない」

「まあ、お前が変身する・・・って意味では、ある意味で化け物だけれどな」

「そうそう！何だっけあのセリフ？『あたし達が、あんた達を倒す光になる！』だっけ？かっこいいわね〜！」

「あ、あんたらねえ！」

バイクを押しながら、4人は公園を後にする。
彼女達が守った、いつも通りの輝く光が降り注ぐ道を歩いて。

光明市を舞台とする、光の結晶——シャイン・エナジーを巡る物語が幕を開ける。

街を愛する少女、泉ヒカリ。

異世界からの来訪者、ライト。

2人が変身するのは、街の人々の光を守る戦士、仮面ライダーシャイン。

街を覆う闇——ダークネスとの戦いは始まった。

第2話 ヒカリとライトの決意 後編（後書き）

ども、ウェイカップです！

シャイン第2話終了しました！いかがだったでしょうか！？

遂に出ました、真の意味で変身を遂げた仮面ライダーシャイン！

決めセリフは『あたし達が、あんた達を倒す光になる！』

やはり燃えるもんですね。

劇中の展開としては、新エナジーが登場しました。

手甲につければ光の剣！膝につければ斬撃キックが発動！

剣モードの元ネタは、かの名作ライトノベル『スレイヤーズ！』の光の剣です。

昨今のライダーで剣武器というのはもはや当たり前ですが、シャインに剣というのは実は悩みました。

と言いますのも、劇中でのヒカリとライトの会話の通り、ヒカリは剣術など使えません。

しかし武器としては持たせたい・・・ああ、どうすれば・・・

「・・・そういえば、ONE PIECEで『スパスパの実』ってあったよな・・・」

様々な能力を与える『悪魔の実』の一つ。衣服を含む全身を刃物に出来る

そんな思いつきから、スラッシュ・エナジーが生まれましたw

ヒカリは空手は得意ですが、剣術（剣道含む）は使った事がないので、主に得意の空手技に追随する形となります。

・・・まあ、もちろんこれだけで終わる訳はないですが（ニヤリw

では、感想お待ちしております！

予告 仮面ライダー×スーパー戦隊 シャイン×オーズ×ゴーカイジャー W

4月1日です。

まあ、そういう感じでご覧くださいw

予告 仮面ライダー×スーパー戦隊 シャイン×オーズ×ゴウカイジャー W

異世界からの侵略者、ダークネスと戦い続ける、仮面ライダーシャインこと泉ヒカリ。

そんな彼女に、一通の手紙が届いた。

手紙の差出人は、とある街に住む従姉妹。

同封されていたチケットを使い、従姉妹の住む街に遊びに行く事になったヒカリ、コウ、朝陽。

そんな3人の前に現れたのは、ダークネスとは違う謎の怪人だった。

「お前、面白いのを連れてるな」

「こいつ、ライトの事が分かるの・・・!？」

『ヒカリ、気をつける。ダークネスではないが、こいつ・・・人間じゃないぞ』

昆虫のような容姿の怪人と遭遇し、やむを得ず戦う事になったヒカリ。

「その欲望、解放しなよ」

「朝陽・・・逃げ、ろお・・・っ！」

「う、そ・・・コウが・・・！」

猫のような姿の怪人が放った一枚のメダルにより、姿を変えてしまったコウ。

そんな彼女らの前に現れたのは、片腕が赤い青年と腰にベルトを巻いた青年。

「ちっ、まためんどくさい『ヤミー』が出てきやがって・・・！さっさとメダル稼げよ」

「分かってるよ。変身！」

【タカ！トラ！バッタ！】

【タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！】

さらに、突如空を切り裂いて現れたのは、1人の赤いスーツを纏った戦士。

世界を超えて現れた彼は自らを海賊と称し、ヒカリに戦いを挑んできた。

「どうやら、退屈しないで済みそうだな。ゴーカイチェンジー！」

【ゴオオカイジャーツ!!】

そして、彼らが操るアイテムが一箇所に結集した事により、世界を覆う闇の力も目を覚ます。

『我が名は零……全ての世界を無に返す存在……』

ヒカリ達が戦ってきた過去の怪人達を蘇らせ、世界を無に返そうとする零。

「おい、その連れども。戦う覚悟はあるか？」

「ああ、覚悟なら……とっくにしてるさ!」

「いくよ、コウ!」

「ふん、いいだろう。使ってやるさ」

「私も、戦います!」

『ゴークイチェンジ!!』

「メダルとエナジーが……!?!」

「これが、あたし達の新しい力・・・！」

3枚の神秘のメダルを司る『仮面ライダーオーズ』。

歴代のスーパー戦隊の力を受け継ぐ『海賊戦隊ゴーカイジャー』。

異世界からもたらされたシャインエナジーの力で戦う『仮面ライダーシャイン』。

出会うはずが無かった戦士達が出会い、史上最大の戦いが幕を開ける。

小説版 仮面ライダー×スーパー戦隊
シャイン&オーズ&ゴーカイジャー
WORLD大戦X^{クロス}

近日公開・・・するかもしれない・・・！

予告 仮面ライダー×スーパー戦隊 シャイン×オーズ×ゴーカイジャー W

え、という嘘予告でした。構成時間、僅か20分！

痛い！石投げないでっ！！

まあ4月1日ですし、本日からライダー40周年映画も公開ですし、折角だから妄想を今日と言う日付に書き残そうと思ひましてはい。

・・・シャイン落ち着いたらやつちまおうかなあ・・・w

では、本編執筆頑張りまっす！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702q/>

仮面ライダーシャイン

2011年10月7日16時11分発行